

久保田千代子さん

1921(大正10)年9月11日生まれ

民間人

所属 摩文仁国民学校教員

戦地 米須(現糸満市)、八重岳



●1945(昭和20)年3月23日 卒業式の日艦砲射撃が始まる

校長先生は天皇陛下の写真を北部に避難させていて、残っているのは教頭先生と女の先生。男の先生方は召集で、みな防衛隊で誰もいなかった。卒業式は、厳かに君が代を歌ったり校歌を歌ったり、揚げば尊しを歌ったり、とても和やかに済んだ。皆喜んで帰った。家でお祝いもしたと思う。てんぷらをやったりお菓子を作ったりしたと思う。

それが10時頃、南の方から艦砲射撃が始まった。これが雨のようにパンパンパン。うんと恐ろしくて恐ろしくて、人々は道に出て、どこに行こうか、どこに行こうか、どこにやろうか、右往左往して騒いでいる。私達は学校の後ろの山にたくさんの自然壕があるから、家族6名、姑、舅、主人の妹、私と子供2名で壕に入った。

役所の人に来て、「ここから上陸するかもしれないから、みんなで北部の方に避難しなさい」「北部へ北部へ」と、皆メガホンで叫んでいた。小さい子が2人いるし、旦那はこのへんの防衛隊にいるし、もう死ぬなら一緒がいいと思って行かなかった。翌日、昨日卒業式をしたレンガ造りの綺麗な学校がもうない。そして米須の部落は全部ない。

●兵隊に壕を追われ、八重岳のお墓の中に

その壕に2、3日いたと思うけれど、日本の兵隊は壕という壕はみんな「一般人は出なさい。自分たちは戦争をするんだ、あなたたちは何もできないでしょう。邪魔だ」と言った。学校にも兵隊がいて、とっても仲良くやっていたのに、いざ戦争になってみたら「あんたたちは出ていけ」と住民を守らない。「出て行け」と言われたらもう、兵隊の言うことを聞かないと大変でしょう。

八重岳に行ってみたら、壕という壕はみな人が入っている。入るところが無くて、ちょうど中腹に墓が三つ空いていて、その時は何の怖さもなく、何も考えることなく、そこに入らなければ入るところがないから入った。

3カ月の赤ちゃんも2歳の子供で入ってそこで生活が始まった。赤ちゃんには何を食べさせたか分からない。粉ミルクをもっていたからこれを舐めさせて。おしめはないから、木の葉でやったはず。

外に出てみると、山の中腹だから慶良間諸島が見える。そして特攻隊が来る。1機。すると、もう雨のように、この特攻機に艦砲射撃。だからこの飛行機は何も落とさなくてコロコロコロ落ちて行く。これを毎日見た。「かわいそうだねえ」と思ったけれども、戦争に敗けるとは思わなかった。日本は必ず勝つんだと、穴の中に入っても勝つんだと、戦争を見たこともないけれど、そう思った。

●1945(昭和20)年6月はじめ 戦線がどんどん南へ下がり、お墓を出て再び米須の部落へ

出たらもう、見るものは皆死人。時には弾が自分の目の前に落ちて、破片でやられたのか足が飛んで来た。

来なくてもいいのに南風原から団体で来ていて、その中に母と父と弟の3人がいた。弟に砲弾の破片が当たって即死。弟を置いて、「私達は部落の人と団体だからね、行くからね」と、父母ももう涙も出ないで、行ってしまった。

自分のおぶっていた長男が、ダラツとなって、親が「この子ダメになってるよ」と言うわけ。ああもう何とも言えない。「降ろしなさい」というから降ろしてね、道において、これだけ。逃げなければまたやられるから、ただ置いただけ。

教頭先生が忘れていった教育勅語をずっと持って歩いていた。負けるとは思わなかったから持っていた。やんばる(北部)に行っていた教頭先生は、「教育勅語がないと命がない。取って来る」といって家族を捨てて、来なければいいのに取りに来た。教頭先生に教育勅語をあげて、喜んだけれど、先生はひめゆりの塔の近くで戦死なされた。

舅が壕を探して来た。入ろうとしたら、「あんたたちは赤ちゃんがいるから入れない。赤ちゃんが泣いたら電波探知機で弾がくるから、赤ちゃんは絶対入れない」と言われた。けれども、舅は「入る権利がある」と言って、無理やり入った。この時にも戦争には勝つんだと思っていた。

2、3日すると、防衛隊が解散して、防衛隊の隊長だった夫が、家族と一緒に自決をしようと思って、手榴弾を三つ持って、軍隊の洋服を着て、刀をさして、探しに来た。会社の社長をしていた叔父さんが、頭がいいから、「捕虜になるんだ」ということを皆に一生懸命言っていた。私達はこの叔父さんは何を言っているんだ、捕虜になんかならないよ恐ろしくてと思っていたが、そこに夫が来た。おじさんは「あんたたちは何をやっているんだ」と手榴弾を取りあげて、軍服もって自分の服を着せて、刀もって、一般民にしたて、「捕虜になるんだ。何かきたら私が真っ先に出るから皆ついてこい」。誰も聞かなかった。この時は昼も夜も迫撃砲で火の海だった。もう外に出られなかった。

●同年6月20日朝 アメリカの兵隊が来て「でてこい、でてこい」する

大変怖かったけれども、叔父さんが「私が真っ先にでるから、皆でておいで」といって、「はいはい」言って出て行った。女の若い人は恐いでしょう。皆20歳前後だから、鍋の煤の黒いのを顔にいっぱい塗って、かわいい人もかわくない人も、何が何やらわからないように塗った。

(取材日:2012年2月8日)